

ヨーロッパ中を巻き込んだ 史上初の世界大戦

膠着する戦線と
果てしない消耗戦

1914年6月に起きたサラエボ事件をきっかけにオーストリアがセルビアに宣戦すると、ドイツもロシア、フランスに宣戦、次いでイギリスも参戦し、戦争は三国同盟諸国と三国協商諸国が全面衝突する第一次世界大戦へと発展した。

短期決戦を目標んでいたドイツは、西部戦線ではベルギーの中立を侵してフランスに攻め込み、パリ近郊まで迫ったが、9月のマルヌの戦いで進撃を阻止されると戦局は塹壕戦に突入した。一方、東部戦線では、ロシア軍の進撃をタンネンベルクの戦いで破ったドイツ軍がポーランドやリトアニアを占領したものの、やはり戦局は膠着状態となった。

長期化した戦争は、女性や植民地の住民を含めた国民全体の協力体制を必要とする総力戦の様相を呈し、各国国内では、社会主義者の多くも戦争に賛成したことで、挙国一致体制が成立した。しかし、果てしない消耗戦が続くと、国民の間では次第に厭戦気運が高まりはじめ、とくにイギリスの海上封鎖により物資の欠乏に苦しんだドイツでは、17年に戦争の継続に反対する一派が社会民主党から分かれて独立社会民主党を結成し、大規模なストライキをくり返した。

戦局を一変させた
アメリカの参戦

膠着状態に陥った戦争が転機を迎えたのは1917年であった。同年、ドイツが中立の国の商船も攻撃対象とする無制限潜水艦作戦を宣言すると、これに反対したアメリカがドイツに宣戦。戦局は連合国優勢へと大きく傾くことになった。同年11月にロシアで革命が起こりドイツと単独講和を結ぶと、翌年ドイツは西部戦線で最後の攻勢に出るが、戦局は打開できず、11月にはキール軍港で起きた水兵の反乱をきっかけにドイツ革命が起こり、ヴェルヘルム2世が退位、休戦条約が結ばれた。

新兵器の導入と
犠牲者の増大

戦車、飛行機などの新兵器が登場し、戦いが大きく変化したことも第一次世界大戦の特徴である。とくに機関銃の登場は歩兵の突撃を困難にし、双方が塹壕を掘って互み合う膠着状態をつくりだした。また、犠牲者の数も飛躍的に増大し、1916年のヴェルダン要塞攻防戦と、続くソムムの戦いでは、双方合わせて70万人以上ともいわれる戦死者を出した。

第一次世界大戦直前のヨーロッパ

